

もしこの世に自分一人しか いなくなったら（ぼっち3）

毎夜、毎夜、焚火。随分と癒され、慰められ、勇気づけられた。が、心に余裕が出来る
と、延々と繰り返される思考地獄にまた嵌り込んでしまう。結論は永遠に出てこない無限
地獄だ。もうずっとその繰り返し。どこかで区切りをつけたいのであるが、区切りをつけ
てスッキリし、心に余裕が出来る、また同じことを考える。

なぜ一人取り残され、一人ぼっちとなってしまったのか。

毎日毎日繰り返して、原因を考え続けた。

あの日、扉を開けて外に出た瞬間に何が起こってしまったのか。

何が要因なのか。

本当は他にも人がいて、自分だけが見えていないのか、通常の世界とは別の次元に入り
込んで、他の人と時間は共有しているのだが、接触できない環境の空間域に紛れ込んでし
まったのか。または迷い込んでしまったのか。

繰り返し繰り返し反芻している。だけど、結論は一向に出てこない。

また涙の出ない嗚咽が始まり、意識が薄れていった。

気が付いたら、夜が明けていた。

気晴らしにと、いつもと違う風景を見に行こうと思った。

そういえば、随分暖かくなってきたので、花見にしようと思いついた。今まで行ったこ
とがある場所では、また何かを思い出して、とても辛い思いをするのに違いないから、今
まで行ったことない。知らない場所に出かけてみよう。

満開だ。見事だ。美しい。行ったことなかった川縁の土手に咲き誇っている。見渡せ
る範囲全てが輝いて見える。暦を失って（見なくなって）今日が何年何月何日の何曜日か
全く意味や定義しなければならない意義が見つからないし、開花や満開の予想情報が皆無
の中にあっても、ドンピシャのタイミングでこの様子を見られたことに、美しい素晴らし
いものに出会えた喜びに加えて、更なる幸せの上乗せがあった。

もう何時間もずっと眺めつづけている。飽きない。これから何かする予定はない。しば
らく見続けてもなんら問題ない。お日様が柔らかく、暖かい。

日が暮れて、どこかに帰らなくてはならない義務や動機は全くない。まして、明日散り
始める様子は全くない。まだ蕾の部分も少なからずある。昔、散り始めが美しいと誰から
ともなく聞いたことがあるし、自分でもそう思っている。まだ更なる上がある。

散り始めるまで、数日ここにいて何か問題あるのか。ない。散り始めたら、帰ればいい
んだ。あつ。帰る必要あるのか。ない。ああ。次を探せばいいのか。